



俳諧無門漢

室曆十三

年

中村俊定文庫

文庫 18

401

1



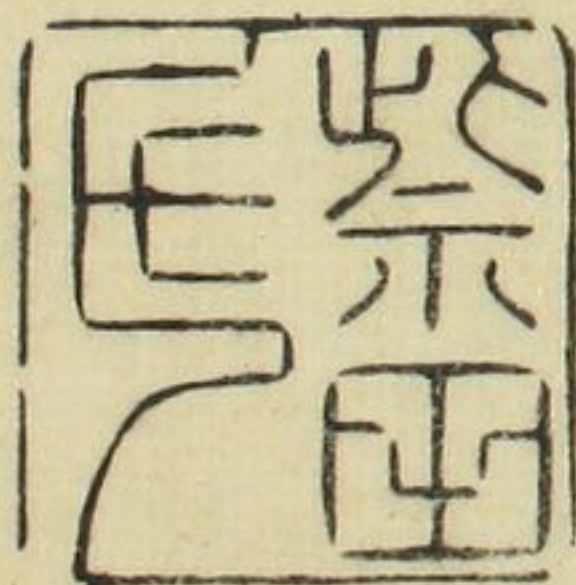
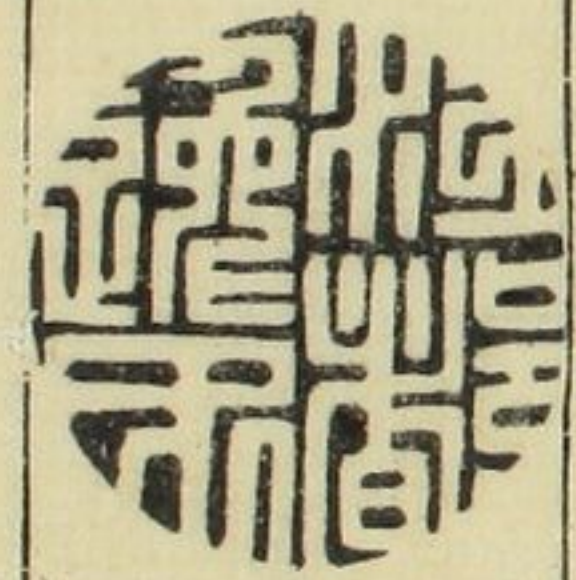
俳諧無門關序

柏樹子之話有賊機祖翁
之喟有古池青山流烏綠
水聳烏砂石輝天星辰敷
地烏江上清風山間明月
嗚呼禪也俳也 是我師所
以有無門關之作矣或問



曰子胡亂指註臂膊向外
不曲子說禪乎說俳乎曰
棒下無忍生爾固有酒債
六謾休指佛前之錢五山
臺上雲蒸飯古佛堂前大
尿天尚未會為爾不惜眉
毛親舉一句曰日面佛月
面佛且道是禪歟俳歟看

看雲如鳥如鳥如鳥如鳥
吐寶曆壬午孟冬白潛居
士鼠腹序



俳諧無門關

目錄

水乃音

辛靖の臆

猫去衣

加馬の雛

大歳の冠

岩端の春

氷有非無

冬れ月

本からし

萌葉の蚊屋

病雁の格

下京れ者



涼比 証 氣 引

不易 流行

俳諧 工夫

機と 見ると 証

支考 一句

切字の 秘

や 敬の 評

音より 唾

麦 畠 麻 畠

西國の 馬

俳諧 如 禪

許 六 句 談

去 来 千 卷

兎 走 蟹

難 波 の 病 床

風 毛 相 款

切字 又 卷

向 上 一 路

句 体 旨 悪

或 時 の 教

附 合 の 響

摺 小 本 の 蝇

真 草 皮 肉

修 行 の 地

昨 日 の 我

涼 一 夕 夕

志 の 取 捨

馬 の 耳

連 俳 の 子 亦 波

鶴 頭 舞

俳 諧 の 二 字

揚 句 の 評

無所

下臥の極

酸く甘く

俗後平話

石の松

素秋の節

俳諧三鳥

以上四十八則



俳諧無門關



愚得坊鼠腹評

雪中庵蓼太頌

水の音

右いけや陸飛こむあけき こんせん

其角翁の向く曰山吹やれ又文字を並て莊嚴其いん
翁曰汝とてハ可し余とかわるハ不可しと宣ふ

译曰学者角の風調と得んをわたり山吹ふ春を

翁の風調と得んをわたり古池のまきとて是とてれ

祖翁佛頂知為の禪を承得て領悟の付り一白也
今天下の佛とよまのいらはちらさぶそのもかくは白は
ふらるものも亦一化佛法の發る附合後解を可ら
理解す一守法受て師を奉り意に奉りてを乃何
領悟の目より一たる祖翁の舍下之阿也と傳りて
承得るにあらんハ幸白と云妙白と云る日々に
又百三百も皆是依草附木の精盡く只日夜相告
佛法を承らるる存さう眼赤の一切皆佛法を承法
と云んは是も妙白と云之終領悟の目より一

或曰いふ都て妙不るを又や日無又曰流然らば
日一子親得頭長三尺知是誰相對無言獨足立

頌曰

世に有る他の古きみくらに 挂なく夜の隱きくらに
ひそりていふる美風多し ありの趣よりや山吹

非有非無

蓮二衆示曰佛法有り有るあらす之をあらはに是別
中乃是別を云る

徹さんとてさしはらふと誦まるとかたて三千番八百

頌曰

松理念の枝はまけさるも　　とまのそを建ふんころ

杖とまの崩おひん　　むしおぢうれ山をのり

冬の月

け本戸や鏡乃とれくその月　　其角

後善選の内はらとまきり下と冬の月霜は月と雲ははら
よすゆれ初は本戸又字はまりて宋の戸と鏡より初曰

角く冬霜と並はら(ま)りもはらとて冬は月と雲ははら
まは天津より霜のふとまはら戸ありはけ本戸のけは
秀造ハ一向も大切はれと壁出板とるふとていそ改へて
元北曰宋の戸は本戸とせら務劣なり去来曰は月と雲はは
あてはれはあはれの元とてと城門ははらとてはらとて
ま風情あはれとてのまとくふとてをなり角をまて
並はらひけるもあことりなり

译曰宋は戸行して尋常なるや城門何してはらとて
並下に足激とては城の風安とてあて師と懐らまらるあらし

頌曰

雲いと白く城は木隠く 叙のさへなる日の影
奈白の長角詩の李まきま 行のりゆと酒のこころめ

猫乃良

羨しおりのいさか付猫のこい 或人

評六曰翁伊賀よりいりまきこく日心と風雅ありもの一なるに
おまこり事あり彼風流けよたにむくお性を取きりこころよりお性
或人名に方ともく人のさへも中す奈白多し然たまにむく

始くお性を取守りたまひり

評曰漢く銀塔の後上告す一たひけ地位とやん人を
祖翁法師と勝と徳と徳とるるいと徳と

頌曰

月の腹に巻くまはる 花はなをまの水と教りく
蓋かたのさ標のまへ くのたんとを世に叙す

本加良之

本からし二日月のとらる 芥今

本からしーの地よも 藤さぬをまらぬ 去来

去来曰二日は月とてし吹らんと働くはかり申う白く遠く藤より
おろゆ前曰分り白く二日の目とてふまのまへに藤よりまゝ目録
除くはせらるる所一汝の白何とぬく藤一まのまへに藤よりまゝ目録の
好句へ取地とて取らるるまのまへのまへに藤よりまゝ目録(正初と
地まゝおとこぬめり)

译曰海とせ人よまのまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録
祖藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録
唯人の信不及

頌曰

檀木堂の風は声 藤梅舎とて藤よりまゝ目録

はらぬとて藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録

駕の雛

去来曰藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録

藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録
懐しとて藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録
去来曰藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録

译曰前つくくおろるるまのまへのまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録のまへに藤よりまゝ目録

頌曰

雛の初志桃の楯に 結ぶ胡葱とて女は孝
理愈の世の賢いあり 子供ははるる前ゆく

萌莢の牧屋

春の去らぬを 萌莢の牧屋に 然人

翁此を言はば 日奈の八重の山に 翁の言はば 翁の言はば
改るる翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば
至り翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば

本日とて 翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば
翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば 翁の言はば

译曰 機輪轉處 達者猶迷 四維上下 南北東西

頌曰

利休茶室 柚香の秋食 園別當の糶の庵下
懶る月夜と 懶れ松の心 ありぬ流れ砂川の水

大茶の冠

おとくし 誠をえん 八重の山に 翁の言はば

九兆

之也の又文字をてふと並くなく句を本曰は奈の季なり
 信佳曰是さくらと並へ一花は強人の思ふ事切なりを本曰物な
 お無何り中人花を重して内親とゆふ然情を人さうらみ
 山跡と惑ひけりまといまふ身余のゆほ及後揚と並て却て
 年の融火とさるふほるさかぬ人信佳程つねききて前
 語りに前曰さくら佳りある所守とて主は九代大業を冠す
 前曰識は一日千軍の融火といふも並る物なり大業一語あり
 評曰九代行ハ已を知ると後一人を評すへ一語あり
 九代と評して曰名將也下は弱兵なり

頌曰

色をてふ色はくら 年ひハ志子如く
 分別の遅ハ刻 年波と論らハ一ふ

病雁の格

病雁は秋をさかりて旅寐小 大せ以
 菘の家ハ小報ふ仰らるいそぐ如 全
 猿義撰の附はる入集也へ一と云九代曰病雁はさるる如れ
 小海をさるるいそぐはるのぢり事なり一と誠と秀逸と云

去来曰小張の白ハ杯一と云ふもその致業一得ら付は
予の口も半ん病房ハ格よく新影りしていりりま城業一
はあんと福一終之高るうよとて入集そま長病曰病房と
小瓶おとく一回一とく一福一たりと笑ひ行ひたり

译曰試去来同十字街頭親爺あつや

頌曰

厚 貴 興 田 いちくちく家
見すやふこ 乍和りき戸

岩端の客

去来曰酒堂ハはると月の様とトゆきと市ハ

客傍にありとやぬや何ゆらや病曰様と何事と汝はる汝
いふ思ひて世をるや去来曰名月と云うて山野吟歌ハゆき
去来曰又一人の強客と云ふけりるとや病曰及も福月の客と
とあまそと名も半んしや歳らくの風流もしけり自持れ
夕とをす人ハはるハ我も杯をりて笑の小ふま入ぬるとめん
去来曰予、新白杯二三等と云ふやゆらめん病去来云云

取る尺八んがしハね者の威もあつや

译曰玄来尚付一炬乃火と云るる性を焼くや

去りもかこのむくかりと云るる是は西の石頭

頌曰

種はさうら乃ほる客ありく空月

下京の音

下京や音積るへの夜の夜 九北

けり社と冠を一箱を始いらくと集りては冠と松きり

九北をきくいまはつる日北は柄は冠は

恙中さうくまのあつた家二度とふいとふあり

玄来曰け又玄来のよはりのけりてを去るゆきとけかこふ

さけいそく知ゆるんは事他門の人すわらふねやう

冠をへーもよりとまする冠ハ又去あつたおしり

译曰玄来も三十棒をのびるも三十棒いんり

頌曰

去ら梅と来なり 陰法むあれ下

浄仏名おとまり道 行旅の使きり

足ハらら上ゆきひて ぶらぶらつらねて
朝の介乃返夜を 言らうと云くさ

涼の夜氣

夕涼夜氣おろしてかしまり 去来

平々初学の附発白の仕やと伺ひたり 翁曰發白ははく
作云たりと云ふと一と試みたりと候して伺ひぬまた又
是もくもちと云ふ一と試みたり

涼日瘴人面赤夢を候かす夢中喃々白日青天

頌曰

吾らうと云ふと 乃曰まじやと云ふ
不やうまじと云ふ 虚空の月ハ丸れ

麦島麻をくけ

清くもあふ子仇のまけや 麦島 去来

元兆曰け麦島ハ麻島とも云ふ人云来曰麦麻之成子蓬之成は
若くは麻と稱す翁曰又云麦島はれぬの端か一帯一帯用と
制一帯ふ之入る人云来

译曰方くまの癸白くはるあまきふと又癸白くはる
法く本来法不法亦法

頌曰

よーとつふと芳の名 阿ーとつふと花の名
いほともまあらー ありれちるハ秋かまや

不易流行

本草曰不易の白とふはるの体と好くとやらハ是と
又流行の白とふはる

译曰不易とて定と命とて馬蹄とてる流行とてん
箭新最とてく汝不易流行とてんと要事也昨夜
三更月窓前とてり今日雨後清風机上落

頌曰

あくと させるりり 天急まらつくハ
いろと 志誠とてれ 白きともやらり
らうハ 夜竹の 一葉ゆー
されと 色く福ん やくたらまやー

西國の馬

和りくはらふあま乃馬 表根の白

許古試と馬以を來と乞ける附は白とをさかけり
翁と仰ふ翁曰今ハ母怪ら一たると嫁ひやれはる
母怪くそをへんを之省と上京の時向く日はいらる
母怪くゆるや翁曰舟の中そふは好ふ事ハも
あまの馬ととハよくち一らんさるそのことせん

許曰ふとてをまを致治るとりうとてをまを致治るとを
祖翁具眼能來様と辨りて字老却て和とあるや

頌曰

世ハ一日のちひまをかきふ ちをこ本核のなきん
只眼のそれ馬と振舞 及び人も哀くハる

俳諧工吏

翁曰今のふいふ見比と工吏と経て席よりて氣ん
以て吐へん改るあそへからほとあり
許曰とて改るあは千里若里奈附り事
なりきいぞと。

頌曰

猶もけいふも花をまねく　ふりかんとつとみね
下終後くひ廟日を長　寐くまの待帰を来

俳諧如禪

交考曰むうのふふと如来禪のこゝ今の俳諧は
祖師禪のこゝ納着をいへ則持す

译曰納をいへ則持す納をきんは作麻生かひい
迦葉破教激矣二祖多に之く臂と断茶箇く是

如来禪茶箇く祖師禪志くく二百とらけく説す

風風も出くろくけき箇の年

誰やらう姿く似く今朝れ去

頌曰

ほろけく水は月　祖師と八根れあらう
かひくやと朝の去　おとくらや雨の年

概と見て説

翁酒堂と説て曰茶白ハ汝くくニツ之ツ茶集をらるもの

あらはれぬと申す乃人きりぬるなりとあり

伴曰いややしいあひて白後には葉なり好肉と刺く
瘡と云ふ事なるんハヤ

頌曰

操之を然の言 而昨日も吾の目も
耳も足て目もきけ 三つならぬりちら糸

許六句後

許六曰登るハお念ととのこ箱目を証は終るの云云ハ云らぬ

伴曰東家の人死にハ西家の人哀とにぞく許六曰
瘡見とあらぬ祖翁伴と幸ふらぬんハ可し

頌曰

鞠ハらうと紙と一と思ハ 鞠とをまきと一と喜ぶ
鞠ハをまきと一と喜けん 鞠ハ追ふと一と喜ぶ

交考一句

交考曰附句は一句二句なり糸白附とハヤと云ふ
何れハ一連綴と云ふハハを場との人付糸糸の糸はたの

乃人金ありて一白く多くハ存するもの

評曰法々を凡人とあらざるは法々なるものと法々を
了きたる祖翁の口授心法ありしと云ひ地位ハ
いきらハ汝等一任を一莖草と云く丈六ハ
金以て之を得ん事哉

頌曰

夜季や竹田乃和法受かえり
又白くまじくふあはれはけり

去来千翁

去来曰附白ハ一白く千方之故に俳諧変化極なり

評曰考ハ一白く附白一白くと云ひ去ハ千方ありと云
汝等却て會聲曰不舎曰と云は是同條と生して
同條と死を以て悟くハ彼と末後の白と云と云るを
曰末後の白作廢生といく同條と生して同條と死を以

頌曰

夜季や竹田の亦法受なる
月去まららみらると云る

切字の秘

弁七日弁の切字と入るゆいゆを弁曰左あり翁曰
汝切字と云るや去来曰いすは傳文なり唯自かこを
ゆる翁曰いんを来曰假令ハ弁のハ一本のやいと云も
梢根あり附白ハ枝のこく大なりと云も全から梢根
あり白ハ切字の有云こくハ弁の体なり翁曰志あり
然と云れハ面新法なりありきを傳文を一切字のゆハ
連能よりゆく秘を撰一人に讀るたかすくと趣く

翁に取ら奉り何と云も秘をくくと云ハ是乃こ
をれハ是奉ハ秘を趣くゆり

译曰読く所謂いとぬハいふまふと候ありれ
きこく去来懸河の辨とけくも物用不着
いんこをれハ叮嚀ハ君り徳と換るる故く

頌曰

いろはをくとりぬるとありしたれつぬらむくのた
ちとり啼ねく寐えくくち候る語と去こくを三け

免の巻

言は日ころさきの皮を巻つくま へせ
周行日いふころか何嵐名曰茶き子供とあきひて
あき子供の業をやりりて一強て理舎すへりて
楸園と踏破てまへ

译曰 免は巻とせし ちらふとまへりてせしこれ
まきりてけい ち老相の知と許して老相の舎とゆふ
汝の知を即芭蕉へせ 汝の舎を即汝

頌曰

分別と量分別と 不即座之即座と
除くは花と鳥と ねりてと淋しきと

や裁の译

或同や式はいふと一きる事と申す 日たのあられ
やの字考き申ふへ

夕うほや秋いふくのみくたれ へせ

葉と画る扇

阿さくはや扇のやねと垣根の 其角
芭蕉翁の白法り

評曰一捧一條乃痕更登小亭頂より奉
なごんハヨ

頌曰

ゆふくのくれ白く 歌葉乃色まき
あさくはれ涼し哉 扇のやうのしん

歌波の病

うつくすは葉のたれきさう歌 文章

去来曰翁歌波の病は人こそ秋の白とまき
我死後の白く一字のお後とをからぬ
ゆりまは只け一白乃まき出来たりとまき
情さやうめ真と信し景と探るまはあり
い何くそそむひありゆりぬ

評曰糸ハ葉なる一悟ら定悟を久し今日
中春十二日肚腹裏まむろく唱と吐きぬ

頌曰

春之秋よの世と拈尾花 誰あふ返の園ハちぬ
粟津ありぬ若の古縁 殊る記乃玉と墨とぬ

盲より唾

盲より唾のうりゆさ月えぬ 去来

以了後或連平師曰花下そけるの許あり俳語
か心感懐のうあまえらると語らまうとあり去来曰
此句ハ十七八年兼の白かりそ此ハ翁も兼も此世も

沙汰まう白くを奉新しく感懐しくとそま白乃位と論
その心至るハ甚下おくそま蕉門の俳友中くは場
居るそそを素きら新しくすて却る今日の連平師
き乃りかしく思ひゆるく

译曰奴ハ婢と見く慙慙く回坑埋

頌曰

東方此女の座をせりり 又遠本のいそるそ
妻よほひめ秋之田原 織北山乃花紅

風毛朝歌

あさう海の帯うらあおとこりね 風毛

魯町日いらあの人のか息なりあけあ来日登白といく
いそれん乃杜奉日箱の朝ふくかか飯食ふおとこりね
あゆあふふ秀拙ゆあ来日箱の白ハ其角う葵上電れ
白と和すところを飽まで巧きり白吞く白のうへに
事りー着るふく朝り風毛う白ハ其角表裏一の月か
そのかーあけ白ハ口と定けハ出りよのく試く作く凡せん
露と出さまて魯町別あといふあ居て尻あやりあさ

本陰う船着といふく嘆て金根のかかりや山をけと十巻と
乞て十白せんと町石といふ娘より娘も弱子石ハ糸をの
眠とふぬき磁ふかとりーの十白草紙並せは市ハ蓋門並分
あ一の名あるまらあけ況集もい出さる箱の白なれあ列のあ
あはとむさひあらるー

あ来日け言自分あゆふと似たり松とああ世向の作を
あさう海の白或々及野辺のむけハ馬の喰まけを
あさう白体のみくゆるとゆふいそあまーた白紙
吐出しくを流とあさうやうらありこあまこあせん

きめは是と記しゆを

译曰德磨の事有り似きりるすハ似く是かろるすハ
是めくは元来左来誤く他のたれん許々の誤脚と
下も魯町塊と逐て階上にはる且得没交涉
只是才文の誤とてく守物口と合取せし出

頌曰

多にきくを誤解 白く去くを誤解
相及るを誤解 誤りたるを誤解

切字又答

嵐	音同	翁	答切盡也
蹄	馬同	翁	答切節也
交	考同	翁	答切一旬成就也
左	来同	翁	答切寄也
惟	然同	翁	答切四十八字各切也

译曰又同又答百回百答權實放牧殺活
擣縦會與不會都任汝等

頌曰



昨日の銭

昨日の銭の象は飽る

評曰 昨日の象は飽るといふは 四十九年の
非然を以て天下の是非を以てする久し 元來祖翁
一法を示さば一字を説き事ありあり

頌曰

梅を	檀林に	木は白ひけ
散る	枯枝の	鳥ふさむく
居け	みちのくふ	あきらむく
さんく	月吾に	ちち茶三餅

向上一路

翁曰ふんいの姿いやはきくして欲連を此下と云ふも
心向上一路と云ふぬ更登曰心の字ふんいの字眼

译曰能かくのやうな會せ初て云ふ人徧語の法山と云水と云事也

頌曰

白髮三千丈 緑愁似個長

戸内しててもとけい眉のまねむ

まね法師の手り思ふ人ごまらぬおのや
みろくくしらくくさるの月

るわけとめりちりき 係乃音 とせ成

涼一きタ

志たらくと寐ととま〜とゆふ〜子 宗而

後義撰の所二白の入集と解く教を吟〜其れは〜
一夕前のいさうのらと法（家と外を〜と云ふゆ〜と云はら〜に
居れ涼〜くゆ〜と〜翁曰是奈と〜今此〜作〜入集と〜

译曰け話祖翁見と情醒と云る〜と云ふり元来大道

郭然〜して目前以断〜成曰目前底作廢生

曰牛頭没馬頭回

頌曰

松葉のいりよけやうぢのひら
松葉のいきぶ又たう門

白体書要

嵐名曰風ハ千変新化すよふまの白体ハ新怪正原
困和強解懐連かこのことはいやう一鈍濁致重薄淡
シタ、ルキ堅強かくれめさハ懸一異句とそんり白た
吾強あふ一

評曰能かたはしく會するもなと若う近り来く
痛捧と嘯まらるりやんいんをまハ合屠也
いと眼入ハ醫者とあふ

頌曰

春柳も弱うら 梅又強からす
ほろけうら花の交 困をまて月もあ

意の取捨

評曰日蓮門徒とるもも捨るはうら嵐名曰平ゆるは何ん

翁曰古ハ衣の白敷定らハ 勅位ニ白くするとかるを
礼式の法ニ一白くを控るハ大切なるを換授するハ
なり一説ニ衣ハ陰陽和合するなり一白くを控下
皆大切と思ふなり一白くを控るともいふハ大切なる
譯曰一ニ多程有りニニ支般ナリ一ニ是乃是以麻得
脚下の鞋と失却する事なくハ可也

頌曰

きく白雲の心まけきと なる山と見まけけり
くくれの内まききとハ 寐りもあはれ

感時の教

嵐者曰花はあつて信ぜらんハ花恨あらんハ是ハ聖
花々同ハ世はつるふと婆ハこれに信ぜんとて或時利
譯曰嵐者月ニ指す法人却てハ什麼と云祝き
或人法同曰兼念ハ飽やましく細嚼ハ飽か

頌曰

けは仇花此一和氣も 換きはあつちき者の四それ
月法ハ價千金なり 紙衣とりぬた乃

馬の耳

馬の耳を治るべき薬一梨の花 支考

玄来曰るの平す不効くまき一と云ふ事ふへ一梨の花と
よき新くす妙し考曰何の効に記すらん吾子おこし
かしらより一筋のソム下さんこせかひけと誦す

译曰雞と之行して得る事と信せられた修りおむる
何の効を事うらん一豫て玄来支考の若く挙一明
三本分の事試す平胃散一貼と云ん

頌曰

秘のそれあきくは 蹄すまふ牛眠
うらまき梨の花 赤風あげ馬の耳

附合の言

ある人附合の言と同義曰く、馬の耳を治るべき薬一梨の花
牙不ろを太刀の反かたて
栲縁の証と爲すをうちく記
けるどあけて右のよく去るをうちく記

太刀と反りの仕方——と譯せざるべし

譯曰 祖翁老婆親切に法人却て恩とあるや我今
法人の死を再返脚と下らん是は了るる礎の上と譯
するも三修者の妙業として譯と流し一盲と流す
人此業と服するより輕三善は七又八十せし修徳
所今におわく丹青と獨歩せん

頌曰

弦をかける尾上の陸 本此居るに答はりて
うも是れ夕暮と 寸馬豆人今もいせり

連徳のふ尔波

或人向連徳ハ初たらふ不ありやつたらふもや更登曰

秋う歩きて為ふち教夕外
秋風と為ふちばゆふへり

け二るに加賀の徳順と翁と女人のふく只け一字はふ尔波
ちうけはふらふ連徳におわく或人天の師きく人事と
譯曰 二大志のけ後身と譯しと教と露り守連徳のたふ
心よりりや初とわや或日子徳ととまうん曰翁け

秦列ふむひ然ハ瀟湘ふむふ君之陳政象ハ許政

頌曰

一とせの花をきき 煉う染れふくせらこ
むとけ乃こなるう ちくこくこくたれ

摺小本の蠅

摺小本て蠅と追うりころく汁

又考曰はるる蠅より素一はるる天下此名んなるし
本とらるるハ摺小本のころく汁を思ひなりたるし

評曰玉ハ火と將く試令ハ石と將て試劔ハ毛と將て試
水と杖ハ將多試と知言らるるれ

頌曰

飯をれとて運ふて来るのり秋の蠅

鷓鴣

あけ下のもたれとて一鷓鴣んは 巴靜

ある人巴靜けはる試詠して曰おしいな故人の中へ一字とあやま
たの字を以て人令危曰汝耳は鷓鴣んはと聞て眼を鷓鴣んを以てん

ちりくーあたの字かくハ発白とあらすまの字はたの一字と能く
あまハくーとんくたのーハハ

山の字をう用ちりやすくーいりや

译曰汝等眼裏のくは眼尺耳裡の声とまをたうは
色とぬい透年と一白と舎すへくハ耳と掩く能す
眼は肉に能くを顔と上り内小着こ上りぬを

頤曰

何事不れも夕くまも 日のいろと月のい
あらたよくこれ 鶯改とさくらも

真草皮肉

其角曰莖門とくハまきりと発白の体ー皮肉骨
附合の体ーゆるく

译曰試ニ休士ニ同いあるは皮肉骨にむるまきり
まきりとまきり一家の之孔の濃澁とかへー事れ

頤曰

冬乃日 ちりみの 茶きくら

俳諧の二字

何人同俳諧の二字いふるも亦登曰是ハ翁の骨髄ヲ以テ
コケテ秘伝ナリト但一佛成道觀見法界草木國土
悉皆成佛ト佛語ヲ授付テハ拒棄して凡多ク一
評曰いへくいどりくいんまんハ汝ヲサマシクシテ
汝ヲサマシクシテ道ヲ示ハシテ一ニ擧一手擧
ト云々多困の人と巡拝者次

頌曰

南無阿彌陀佛

修行の地

其角曰ういふの修行ハ是ハ教書なる目ノ之ヲ訓ハシテ
多ク學ヒテ一向ノ心ヲ專トシテ一法ヲ修ムヘクハ
解カシキハ自らハあぬ一ノ家といふの上ニ坐シテ
人乃チもサマシクシテ一向ノ心ヲ專トシテ一法ヲ修ムヘクハ
作者ハ意味のうらま月日ナリテ終ニ功の成るをん
評曰凡修行ハ九段の言ハテ一貫ナリト云々
此を是竿上竿下の病と免をばらまらと云々様の人

五方附八作摩生曰遠箇ハ志らくとく奈箇を如何

頌曰

馬ノ足素直くしん 子ノハ堅くへくあ
花さけハ紫とあて 時と人ハあましく

揚句の译

吏登或附衆示曰屏風の陰に足あり菓子食すと云ふハ
揚句のゆりやゆりや

译曰若是人方の通士ありハ世下の兼尚とんばる人曰

子試道日三生六十劫の位汝に向て再履脚と下さし

頌曰

子秋葉ハ民をたぐは 万葉集ハ余とも乃ふ
世はわたしの松乃あらうと 只さゆくと吹くおまむる

下臥の橋

下臥の橋りこかこやいとゆくら

翁洛とて譯て曰けし其角々集しはるりいふおまひ
入集しん去来日系橋の十分と嘆ふ形容よくしむおませ

きつたにゆらすや箱曰しに課し何りるなまおわく肝く
めいする事あり初て発向に成(き)る事と成まに事とまきり
译曰八割と遅しおろけりふりしはくのせしといふも更
糸をりる三十年よりくなまの増ん

頌曰

下ありはさきりくはしり糸はくま

酸く耳く

凡言曰何令れ変化におしむね料理のうまくらしく酸く

からさうくし能くうくあしきとけくはけり
変化しハハシり

译曰鶴の脚長けは天と切内は悲し
是とほく内ハ悲しむ物言ふり今もれ伽徳のき短
一帯の序破念句この変化後崑のたは梅まなり字を
渾帯之箇の事と香了もりりらんハハ

頌曰

く歌 ちのい あま みる

信後平話

翁曰ふんかいと信後平話と正しくなるかと更之也曰
正の字道流の字眼なり

評曰翁の言はれありはほく更之なり信後今日泰堂れ
人衆の言をたふし佛法の上におめておとほを説く
よくいふまゝに徹底せしむ祖翁の教に熱誠を以
春の日の如く

頌曰

遠くよはかり 及まら今かり

至之は松

善くし事れつやひい松 葵太

或人難曰凡奔るは争くの如く信を求るものより大抵
作伏せざるにありぬるなり 後馬曰信を信ら
奔るにあらず信を信らしてぬるなりは法法と一白以
奉せし視ん或人を信

評曰後馬も亦賊馬の業を賊と逆事と解するもの
志くせしことと奈箇の後馬賊なりを

頌曰

あふれわ乃月と暮る照るに
言成日とちと見さるし

素秋の端

或向素秋の子俳諧深秘のうらやま事と暮る太日
汝素秋の事と暮る人三秋の夜地と臨口に
俳諧の自在とけく文之眼と関るる三幸の夕と暮る事
知て始と知へ一暮るらるる將暮事とけく芭蕉と同

汗日汝後人群と暮る隊と従一如雲と暮る神り願成
ちくく飲く然うて俳諧後一妙と説試又一幸と
暮るハ口喃と知得るる度ハ出暮れ暮る人ハ
三十年の恒家骨と換て出来ると待却て汝に向く
道今日我東行ゆりと坊事なるは下中

頌曰

虫乃暮もかきくも暮れ下葉をなす
いほくと娘のけく月と暮るハ花と暮る

俳諧三鳥

或人更登之和歌三鳥の傳を乞登曰かこけけりく
之鳥ハ古今傳受りて下はゆのとの嘗くちばらふ
事より守まて我俳諧の三鳥なり傳く源林一なる
や此凡そ名目くはくさる人もありんぬりて年れ
執んてつてこそまるとき人曰さる鳥うりねみそさか

律曰昔華山令上はむわく迦葉破類微若しん
釈き曰然し正法眼藏涅槃妙心実相無相微妙
法門教外別傳不立文字わり摩訶迦葉又附屬すと

りしり西天の四七東土の二之江南江の八七宗とわりて
棒と掉唱と行一衆と匡徒と傾きりもは正法眼藏と
滅却せん事以忍まこまへ更至れくあ傳のふふれ
正法眼藏とは是れ一之他家の児孫とむとま下之表由
せん事とむも実之考後安親切し義人は俳諧の三鳥は
おんごちもいふに六十の骨節八萬四千の毛竅といふ
通心と齒の類とわけて齒を提擲して大苦惱と
交る人のゆくけ熱熾丸と吞うて吐きも吐きも吞う
吞ゆす愈々胃腸熱回一陳せし唾子の夢のさめりり

夫よりいへりて初ては正法眼を自覚せん或曰夫を
三をれ目取あけて三の意を悟へりといふ曰汝ららば
印り入るの家跡をあらすは一言の傳ふ言ひらるも是
まよとあり蛇とむらりをり甚の交渉をりて曰みは
こつたの工夫をわくは事なきは曰禪を舍てきは佛と
舍て佛と舍ては禪を舍て汝は麻痺候はす事なる

頌曰

貫旨自得妙

